



海老沼の執念の銅

柔道男子66キ級

海老沼



男子66キ級3位決定戦 ポーランド選手に一本勝ちした海老沼匡=エクセル



ロンドン五輪第3日の29日、柔道は2階級を行之い、男子66キ級の海老沼匡(パーク24)は3位決定戦でザグロドニク(ポーランド)に大腰で一本勝ちし、銅メダルを獲得した。

海老沼は曹準好(韓国)との準々決勝で、異例の旗判定やり直しの末に優

柔らの道一直線

少年時代から柔らの道一直線だった。口数は少

勢勝ち。準決勝はシャフダトゥアシベリ(グルジア)に一本負けした。

なく、感情は表に出さない。得意は背負い投げと内股。男子66キ級の海老沼は、正統派の言葉がびったりだ。憧れの「平成の三四郎」古賀稔彦氏を追い、五輪の舞台で銅メダルを手にした。

3人兄弟の末っ子は小学校を卒業すると2人の兄を追い、数々の名選手を輩出した柔道私塾「講道学舎」の門をたたいた。東京・弦巻中―世田谷学園高に通い、早朝から晩まで柔道漬けの日々。同期生が卒業時には半減する厳しさだったが「やめるくらいなら死ぬという気持ちで耐え抜いた」。全ては小学生の時に誓った「五輪で優勝」を果たすためだった。

講道学舎師範として海老沼を指導した持田治也氏(47)には忘れられない光景がある。兄の試合についてきて、講道学舎の輪にまぎれた小学3年生を初めて見て驚いた。「鋭い眼光がキラキラと輝いていた。僕に何を教えてくれるのと訴えかけるような眼光。この子は世界に出ると直感した」

柔道にいちずに向き合い続ける。試合前は道着を塩で清める。「自分の感覚が逃げるような気がするから」と、他人に道着を触られることを嫌う。優勝した昨夏の世界選手権は、開催地のパリから帰国した翌日に練習を再開した。「浮かれていたら足をすくわれる」と自らを律する。道場に真っ先に現れ、帰るのは最後だ。

1992年バルセロナ五輪で大柄な相手をばったばったと投げて優勝した古賀氏を目標とする。「投げた瞬間に相手が宙を舞っている。本当に格好いいな」と声を弾ませる。短く刈り上げた頭で畳に立つ古風な男は大先輩を追いかけ、鈍く輝くメダルを得た。